

南北朝仏教における法華一乗思想の受容

——光宅寺法雲を中心に——

早 川 貴 司

一 はじめに

『妙法蓮華經』は四〇六年に鳩摩羅什(三四四—四一三あるいは三五〇—四〇九)によって漢訳されて以来、中国仏教に多大なる影響を与えてきた。

やがて、隋代において『法華經』の「一乗」が三乗を止揚したものなのか、三乗中の菩薩乗と同じものなのかという問題が提起され、論争されてきた。従来の研究においては、「十方世界中尚無二乗。何況有三。」⁽¹⁾「十方仏土中 唯一乘法無二亦無三」など文に見られる「二」「三」の語を複数としての二乗・三乗と解釈されたことが、論争のきっかけとなったと指摘されている。

しかし、筆者は『法華經』の一乗が注目された原因が言語的な理由だけにあったとは考えがたい。そこで本稿では、羅什とその門下である僧叡・竺道生・慧観、梁の三大法師の一人である光宅寺法雲の法華經観を併せて考察し、中国仏教界

において『法華經』の一乗が注目された原因について再検討したい。

二 鳩摩羅什ならびに羅什門下の法華經観

① 鳩摩羅什の説

鳩摩羅什の法華經観については横超慧日氏⁽²⁾、菅野博史氏⁽³⁾、采翠晃氏⁽⁴⁾らによって詳細な検討がなされており、改めて考察する必要もないが、羅什と彼の門下の共通点と相違点を明らかにするため、その概略を取り上げてみることにする。

鳩摩羅什と盧山慧遠との往復書簡を編集した『大乘大義章』の中で羅什が『法華經』に關説している部分がいくつか見られるが、第十問答「次問羅漢受決并答」の中で羅什は『法華經』と『般若經』の説時の前後に關して次のように述べている。

又仏説般若波羅蜜時。未說法華經。是諸仏欲入涅槃時。最後於清淨衆中。演說秘藏。(大正四五・一三四上)

南北朝仏教における法華一乘思想の受容（早川）

『般若経』が説かれた時は、『法華経』は説かれておらず、『法華経』は仏たちが涅槃に入る時、清浄衆に対して説かれる秘蔵の教えであるとしている。また『法華経』に対しては、次のような見解を述べている。

又阿羅漢還生者。唯法華経説。無量千万経。皆言阿羅漢。於後邊身滅度。而法華経。是諸仏秘蔵。不可以此義。難於餘経。若專執法華経。以為決定者。声聞三蔵。及餘摩訶衍経。寝而不用。又有経言。菩薩畏阿羅漢辟支仏道。過於地獄。何以故。墮於地獄。還可作仏。若爾者。唯有法華一経可信。餘経皆為虚妄。是故不応執著一経。不信一切経法。（同・一三三中）

羅什は、『法華経』を「阿羅漢作仏」を説く秘蔵の教えとして重視しているが、『法華経』一経に執着して他のすべての経法を信じないということがあつてはならないと注意を促している。

② 僧叡の説

僧叡（生没年不詳）は羅什門下の一人であり、『法華経後序』・『喩疑』を著しているが、これらの著作を通して彼の法華経観を探ってみることにする。

・『法華経後序』

法華経者。諸仏之秘蔵。衆経之実体也。以華為名者。照其本也。称分陀利者。美其盛也。所興既玄。其旨甚婉。自非達識伝之。罕有得其門者。夫百卉藥木之英。物実之本也。八万四千法蔵者。道果之原也。故以喩焉。諸華之中蓮華最勝。華而未敷名屈摩羅。敷而将落名迦摩羅。処中盛時名分陀利。未敷喩二道。将落譬泥洹。

榮曜独足以喩斯典。至如般若諸経。深無不極。故道者以之而帰。大無不該。故乗者以之而済。然其大略皆以適化為本。応務之門不得不以善權為用。權之為化悟物雖弘於実体不足皆属法華。固其宜矣。（大正五五・五七中）

・『喩疑』

三蔵祛其染滯。般若除其虚妄。法華開一究竟。泥洹闡其実化。此三津開照。照無遺矣。但優劣存乎人。深浅在其悟。…答言法華開仏知見。亦可皆有為仏性。（同・四一中―四二上）

『法華経後序』において、僧叡は声聞・縁覚を「屈摩羅」（開花していない蓮華）にたとえ、『法華経』を八万四千の法蔵の中でも仏たちの秘蔵と位置づけている。更に『般若経』は衆生を教化するための方便の働きは廣大であるが、眞実の体を明らかにするという点では『法華経』に及ばないとし、『法華経』の偉大さを称揚している。『喩疑』では、『般若』・『法華』・『涅槃』の三経を「大法三門」⁽⁵⁾と称し、法そのものに優劣はないとしているが、『涅槃経』の「一切衆生悉有仏性」の説の正当性を証するために『法華経』の「開仏知見」の教説を引用している。⁽⁶⁾

③ 竺道生の説

竺道生（三五五頃―四三四）は、長安に赴いて羅什に師事した後、江南に帰り法華経疏二巻を著した。道生の『妙法蓮華経疏』は『妙法蓮華経』の最古の注釈である。彼は『妙法蓮

華經』の「如来但以一仏乗故為衆生說法。無有餘乘若二若三。」の文に対して、

若二若三。二第二乗也。三第三乗。亦応無第一。第一不乖所以大。故不無之。既無二三。一亦去矣。(新纂大日本統藏經二七・五上)

道生は「二」を「第二」、「三」を「第三」と解釈しているが、第二乗は縁覚乗、第三乗とは声聞乗であり、菩薩乗を第一乗と位置づけているものと考えられる。先学によれば、道生は思想的には「三車説」に相当すると言われているが、文中の「一亦去矣」とは第一乗も最後には捨てられるべきであつて、第二乗、第三乗、そして第一乗にも拘泥しない空無所得の立場を最終目的とした解釈を意味するものであろう。

このような点から見ても、道生も『法華經』の一仏乗と三乗中の菩薩乗との関係は後代ほど問題視していないようである。

また、道生は『法花經疏』の冒頭部分において、

妙法。夫至像無形。至音無声。希微絶朕思之境。豈有形言者哉。所以殊經異唱者。理豈然乎。寔由蒼生機感不一。啓悟万端。是以大聖示有分流之疏。顯以参差之教。始於道樹。終于泥日。凡說四種法輪。一者善淨法輪。謂始說一善。乃至四空。令去三塗之穢。故謂之淨。二者方便法輪。謂以無漏道品。得二涅槃。謂之方便。三者真実法輪。謂破三之偽。成一之美。謂之真実。四者無余法輪。斯則會歸之談。乃說常住妙旨。謂無余也。(同・一中)

「四種法輪」という説を挙げているが、これは、釈尊が成

南北朝仏教における法華一乗思想の受容(早川)

道してから涅槃に入るまでの一生涯の中で四種の教えを説いた事を明らかにしたものである。第一の善淨法輪は人天乗、第二の方便法輪は声聞乗・縁覚乗の二乗教、第三の真実法輪は『法華經』方便品の三乗方便・一乗真実の説を指し、第四の無余法輪は、『法華經』如来寿量品の仏身常住の説を指すものと考えられるが、この説は『法華經』の所説に基づいている事が先学によって指摘されている⁽⁸⁾。

④慧観の説

慧観(生没年不詳)は、初め廬山の慧遠に師事し、やがて長安に赴いて羅什に学んだ後、建康に来て南朝仏教界の指導者となった人物である。彼は、長安で羅什に学んでいた時、『法華宗要序』を著わし、『涅槃經』が江南に伝わった時、その經序を作つて、二教五時の説を形成したと言われている。なお、二教五時説に関しては、吉藏の『三論玄義』の記述を引用する。

・『法華宗要序』

夫本際冥湛則神根凝一。涉動離淳則精龜異陳。於是心轡競策塵想。諍馳。翳有淺深則昏明殊鏡。是以從初得仏暨于此經。始応物開津。故三乘別流。別流非真則終期有會。會必同源。故其乘唯一。唯一無上。故謂之妙法。頌曰。是乘微妙。清淨第一。於諸世間。最無有上。(大正五五・五七上)

・『三論玄義』

言五時者。昔涅槃初度江左。宋道場寺沙門慧観仍製經序。略判仏

南北朝仏教における法華一乗思想の受容（早川）

教凡有二科。一者頓教。即華嚴之流。但為菩薩具足顯理。二者始從鹿苑終竟鵠林。自淺至深。謂之漸教。於漸教內開為五時。一者三乘別教。…二者般若通化三機。謂三乘通教。三者淨名思益讚揚菩薩抑挫聲聞。謂抑揚教。四者法華會彼三乘同歸一極。謂同歸教。五者涅槃名常住教。（大正四五・五中）

『法華宗要序』において慧觀は「妙法」を解釈する際、三乗は仮の存在であり、「妙法」は唯一で最高の乗であると位置づけている。そして、『三論玄義』に記されている二教五時説では、仏教が頓教と漸教に分けられており、漸教を三乘別教・三乘通教・抑揚教・同歸教・常住教の五つの段階に分け、『法華經』は第四時の同歸教に配当されている。

この教判は、最初の説法は三乗の教えであり成道後四十余年説である法華に至って一乗に帰すると言う『法華經』の記述に基づいている。⁽⁹⁾

これらの説から、鳩摩羅什の門人たちが羅什以上に『法華經』重視に傾いていた形跡が窺えるのである。

三 光宅寺法雲の法華經觀

光宅寺法雲（四六七―五二九）は、梁の三大法師の一人であり、彼の法華学は南北朝時代において傑出した地位を占めるものであった。彼の著作として『法華義記』八巻が現存するが、これは法雲が『法華經』について講義した内容を弟子が筆録したものである。

『妙法蓮華經』の「舍利弗。十方世界中尚無二乘。何況有三。」文に対して法雲は、

舍利弗十方仏世尚無二乘。何況有三。此明因一。言尚無二乘者言。尚無偏行六度菩薩乘辟支仏乘何況有聲聞乘。故知唯是一仏乘。（大正三三・六〇四中）

偏行六度の菩薩・辟支仏（緣覺）・聲聞の三乗を方便として捉えた解釈をしている。従来の研究では、『法華經』の「尚無二乘。何況有三」、「若二若三」、「無二亦無三」の「二」、「三」の語を「二つ、三つ」と讀んだ事が原因であると考えられてきたが、『法華義記』巻一において、法雲は次のように述べている。

① 釈迦如来初応此土乃。欲覺悟長迷遠同極聖。但以衆生宿殖善微過去因弱。…是故不可頓明一乘因果大理。事不得已故初詣鹿苑。開三乘異因。指別為趣果。如是荏苒至於大品明教度人。菴羅説法弘道經年歷歲。猶明異因別果長養物機。…至今王城始称如来出世之大意。破三乘定執之心。闡揚莫二之教同歸之理。（同・五七二下）

② 今言妙法者名是絶鹿之奇。語法則因果双談。何者昔日仏偏行六度為因。感有為無為二種之果。若論無為果只斷分段結使。三界報亡為之果。初言八十後言七百阿僧祇住世。以已所得化未聞。小小益物作有為果用。然此因此果未盡為極之美称之曰鹿。今日明因総括万善。為同歸之路。…亦有二種果。断絶三界内外兩因。滅除此彼二報無為果之極。有為果用者。種智一朗仏果齊明。理而推之。于時則応入無余涅槃至寂然之地。但大悲之意不限。度

人之心無窮。近籍神通之力。遠由大衆万行之感。遂能延金剛心留住於世。壽命無窮益物無崖。…是則因絕衆衆之名。果極唯精之極。是故因果兩法俱稱為妙法。(同・五七二下—五七三上)

①の部分では、五時教判に基づいて釈尊一代の教化を整理し、三乗別教(有相教)・『大品般若經』・『維摩經』には三因果の教えが説かれていたのに対し、『法華經』は三乗に執着する心を破り、「一乗因果の大理」・「万善同歸」を明かす教えと位置づけている。

②の部分では、「因果論」の視点から、昔日の大乘を「因縁果」と位置づけているのに対して、『法華經』の一乗を「妙因妙果」と称揚している。

このように、三乗中の菩薩乗と『法華經』の「一乗」との関係は法雲の頃から問題視されたと言えるが、その原因としては、『法華經』が羅什門下によって重要視された事や、『法華經』の一乗説が中国仏教界において注目され、五時教判を中心とした江南仏教教学体系の基盤となっていた事も関係していたと思われる。

四 結語

これまで『法華經』の「一乗」が中国南北朝仏教においてどのように受容され、理解されてきたかという問題を、鳩摩羅什・その門下・光宅寺法雲の理解と扱いを中心に検討して

南北朝仏教における法華一乗思想の受容(早川)

きた。その結果をまとめれば、次の事が言えるであろう。すなわち、羅什は『法華經』を「阿羅漢作仏」を説く教えとして重視していたが、一經不固執の立場を取り、三乗中の菩薩乗と『法華經』の一乗との関係については何も言及してない。それに対して、僧叡・道生は羅什の一經不固執の立場を受け継いでいるものの、『法華經』に対して特別な関心を払い、教説を整理した形跡がみられる。慧観の方は菩薩乗と一乗との関係を明確にはしていないが、三乗を方便とし、『法華經』の一乗を最高位に置き、更に『法華經』の前三後一の説に基づいて五時教判を立てている。羅什門下が『法華經』を重視するようになった原因は、彼らが『妙法蓮華經』の翻訳に関与し、羅什の講義を通じて『法華經』の教説に賛同する点が多々あったからであろう。⁽¹¹⁾

光宅寺法雲は三乗中の菩薩乗(もしくは昔日の大乘)を方便とみなし、『法華經』の一乗を称揚しているが、従来の研究では、「一無く亦た三無し」等の「二」と「三」を「二つ、三つ」と解釈された事によって、菩薩乗と『法華經』の一乗との関係が問題視されたと考えられてきた。しかしこれは言語的な問題だけではなく、『法華經』が羅什門下を中心として中国仏教界において注目され、重要視された事も原因の一つとして考えられる。

南北朝仏教における法華一乗思想の受容（早川）

- 1 坂本幸男「中国仏教と法華思想の連関」五二四—五二五頁（坂本幸男編『法華経の思想と文化』平楽寺書店、一九六五年）、野村耀昌「一仏乗の思想」一四九頁（平川彰／梶山雄一／高崎直道編『講座・大乘仏教 第四巻 法華思想』春秋社、一九八三）。
- 2 横超慧日「竺道生撰『法華経疏』の研究」一五一—一六三頁（横超慧日『法華思想の研究』平楽寺書店、昭和五十年）。
- 3 菅野博史『中国法華思想の研究』十三—二十頁、春秋社、平成六年。
- 4 采翠晃「大乘大義章」中における『法華経』観」四十四—六十四頁（『佛教学セミナー』第七十三号、平成十三年）、鳩摩羅什の『法華経』観」二十八—四十八頁（『大谷学報』第八十一巻 第三号、平成十四年）。
- 5 『出三蔵記集』大正五五・四十一下。
- 6 『妙法蓮華経』大正九・七上。
- 7 横超前掲論文二一五—二一七頁、野村耀昌「一仏乗の思想」一四二—一四五頁・新田雅章「中国における法華経研究」二二二—二三三頁（『講座・大乘仏教 第四巻 法華思想』等を参照）。
- 8 横超前掲論文一八〇—一九一頁参照。
- 9 横超慧日「劉宋慧観の法華経観」九—十一頁（『佛教学セミナー』第十三号、昭和四十六年）慧観の五時教判は『法華玄義』卷十（大正三三、八〇—一上—中）にも紹介されているが、三乗別教は「有相教」、三乗通教が「無相教」、抑揚教が「褒貶抑揚教」と記されており、『三論玄義』の命名とは若干異なる。しかし本稿では特に問題にする必要はない。
- 10 吉蔵の『法華玄論』卷第二によれば、慧遠は『法華経』の一

乗を以て宗とし、中興寺僧印は『法華経』を一乗の実慧を以つて体としていたとされている。これらの説等から『法華経』の「一乗」が中国仏教界において注目されていた形跡が窺える。（大正三十四・三七九—三八一上参照）。

11 『法華宗要序』（『出三蔵記集』大正五五・五七上—中）・『法華経後序』（同・下）参照。

〈キーワード〉 鳩摩羅什、僧叡、竺道生、慧観、光宅寺法雲、『法華経』、『法華義記』、一乗

（四天王寺学園講師）

新刊紹介

田中 良昭

『敦煌禅宗文献の研究』

A五版・七二二頁・本体価格三五、〇〇〇円
大東出版社・二〇〇九年二月（第二刷）